

マナー会得 外部指導で

学校でのマナー学習に協力するNPO法人がある。

「相手の顔を見て『よろしくお願ひします』と言ったら、腰を折り、頭ではなく心を下げます」「自分の心からリボンを出して相手の心と結びつけて下さい」

福岡県岡垣町立山田小学校の体育館に、日本古来の正しい礼儀作法を教える小笠原礼法総師範、鈴木万亀子さんの声が響いた。鈴木さんも理事を務めるNPO法人「マナーキッズプロジェクト」（本部・東京都杉並区）が企画した「マナーキッズ教室」だ。

1年生約150人は、あいさつの心得を聞いた後、ボランティアで県内外から集まった愛好家を先生役にテニスを習った。児童は「プレーごっこに『よろしくお

No.703

教育ルネサンス



「握手するときには相手の目を見て」。マナーの学習を運動と組み合わせたマナー教室（山田小で）

願ひします」「ありがとうございました」とあいさつするのがルールだ。

同じころ、校舎内のラウンジでは、4年生約90人が、移動した鈴木総師範から「あいさつは目下から目上にするのが先」「ねぶり箸をしてはいけない」といった、マナーを教わった。

山田小では体育と道徳の時間を使い、10月3日までの3日間に1～4年生全員が、この教室を受講した。「学校では普段からあいさつの指導をしているが、児童は聞き流してしまいがち。外部の力を借りれば、新鮮な気持ちで聞いてくれ

るのでは、と考えた」と木原貞美校長（52）。

鈴木総師範によるしつけの講演もあり、保護者が子供との接し方も学んだ。

＊

マナーキッズプロジェクト理事長の田中日出男さん（66）は、早稲田大学の庭球

部出身。大手化学会社の役員だった1996年、同部OBに呼びかけ、小学生にテニスを通じてマナーを教える教室を始めた。

会社で人事・労務を担当していた約20年前、社員が普段からあいさつをかわさないことに気付いたのが、

マナーを考えるようになったきっかけ。「何でかなと思っていたら、近所の小学校でも、登校した児童が先生にあいさつしない。以来、

子供のうちから教える必要性を感じ続けていた」

2005年からは日本テニス協会が教室の普及に乗り出し、これまでに全国約130か所で開催。田中さ

んは今年6月、テニス以外でもマナーが学べる教室を展開できるよう、NPOを設立した。

7月に教室を開いた青森県八戸市立新井田小学校では、教師があいさつのできない児童に接する時、鈴木総師範の言葉を引用して「心のリボンが結ばなくて残念だな」と話すようになった。できるようになると「あなたとリボンが結べてうれしい」とほめる。子供たちにも「礼儀の総師範から直接学んだ」という印象が強に残っているからだ。

「児童をほめるきっかけが作れ、『またやってみよう』と思わせる良いサイクルが生まれた。『ダメ出し』の指導をしがたかった教師側の意識も変わった」と生徒指導担当の藤原公浩教諭（44）。

あいさつや礼儀を教える機会が減る中で、外からの刺激は一定の効果を生む。催しをどう根付かせるかは、学校の宿題だろう。（高橋敦人、写真も）

